

セッション I

19世紀の東アジアと日本—何がどう変わったのか—

【総括】

小 風 秀 雅*

本シンポジウムは、西洋世界が東アジアを本格的に取り込んで、グローバル世界が成立した時期である19世紀中葉を回転軸に、東アジアがどう変わったのか、というテーマを採り上げ、20世紀まで展望した。

報告者・パネリストには、近世史においてこれまでの鎖国概念を覆して新たな東アジア像を提示し、学会に大きな影響を与え続けている立教大学名誉教授の荒野泰典氏、日清戦争を世界史的視野の中で捉え直し、19世紀から20世紀への東アジアのダイナミックな転換を明らかにして国際的にも注目されている本学RFの古結諒子氏、近代日本の転換期とも言える大正期における日本社会の変化を、政党を軸として新たな視角から描き出し、学会をリードしている創価大学教授の季武嘉也氏の三名をお迎えした。最後に触れるように、自画自賛の批判を甘受しても、このメンバーはベストであったと認識していることを記しておきたい。

個々のご報告の内容については、それぞれの報告要旨をご覧ください。パネルディスカッションでは、談論風発、様々な発言が飛び出し、大変刺激的な議論となった。起こした原稿を見ると、司会者の発言がかなり多くの時間をとってしまっており、折角の議論が十分に展開されたとは言いがたいことに気づかされ、反省しているところであるが、出席者の達意の発言により、中身の濃いまとまりのあるディスカッションになっている。三氏に深く感謝する次第である。

長々しいコメントは総括にならないので簡単にまとめた。

シンポジウムは鎖国、不平等条約に関する言説構造の問題に始まったが、早速荒野氏により、教科書から鎖国は消えたが開国はそのまま残っている、という問題提起があり、伝統的アジア世界への視角に乏しかった近代史研究の問題点が浮き彫りにされた。

ディスカッションでは、華夷秩序、中華意識、宗主権、三つの帝国など、伝統的な東アジアにおける国際秩序と秩序意識について議論された。多くの微妙な問題が含まれる論点ばかりであるが、とくに、荒野氏の提起した日本型小帝国あるいはエスノセントリズムをめぐって、帝国とは何か、という問題が近代の帝国主義とも関係させながら議論された点が新鮮であった。この議論は近世史と近代史との対話が必要な分野であり、一時間のパネルで何らかの結論が出るような問題ではもちろんないが、近代においてもこの問題が連続しているという認識が共有されたことは大きな成果であった。

また、季武氏がベルサイユ体制とワシントン体制を国際秩序の水平性と階層性の違いから説明されたことから、五族協和における階層性の指摘や、琉球・アイヌなどの日本型小帝国における周辺理解など、近代とのつながりについて議論が発展したことは、本パネルの大きな成果ではなかったか、と思われる。さらに、19世紀と20世紀はどこがどう違うのか、という問題点を近世に遡って比較史的に議論できたことや、中華意識と帝国主

*お茶の水女子大学教授

義の秩序構造の類似性に関して展開された議論は、近代に止まらず現代における東アジアの国際秩序を理解する上でも重要な視点となるであろう。

最後に個人的感想を一言。現状認識は本シンポのテーマではないが、東アジアの国際秩序を考えると、意識の問題は、現代においても非常に重要なポイントである。「かくありき」(ザイン)という歴史的視点と、「かくあるべし」(ゾルレン)という認識論的視点が交錯し衝突する東アジアの現在を見るとき、その天秤がどちらかに偏ることは、非常に危うい。観念的な「かくあるべき」世界を、「かくある」現実の世界に一致させようとするのは、それぞれの観念が無秩序に衝突することにつながり、必然的に対話が不能になる、ということである。

そこに陥らないためには、一つ一つの言説構造を自ら解剖するとともに、視座の違いによるそれぞれの立場の距離や乖離を明らかにすることを通じて、東アジアの秩序意識構造の全体がなぜ調和的に存在していたのか、その調和は何故失われたのか、調和を取り戻すためにはどうしたらよいか、を観念論的ではなく歴史的文脈に即して説明していく作業が必須なのである。

その作業を、専門の時代を超えて、分野を超えて、国際的に進めていくことが、今現在において必要欠くべからざる課題なのだ、という念に強くかられたパネルであった。